

『菩薩瓔珞本業經』の諸本について

——敦煌写本 S.3460 を中心に——

藤 谷 昌 紀

はじめに

近年の大藏經及び漢文仏典の写本・版本類に対する調査・研究の飛躍的進展の中、現在各種の影印本等が多数出版されといった状況にあり、これまで漢文仏典研究の基本テキストとされてきた『大正藏』以外の諸資料、例えば敦煌写本や房山石經本などが重要な異本として注目されてきている。そこで今回、筆者が当面の研究課題としている『菩薩瓔珞本業經』（以下『瓔珞經』と略）の諸本の中、特に敦煌写本 S.3460 に注目し、その意義と他の諸本との関係について概観してみたい。

一 敦煌写本中の『瓔珞經』

—— S.3460 と『菩薩瓔珞本業經』 ——

これまで敦煌写本を利用する際に広く参照されてきた『敦煌遺書總目索引』（中華書局、一九八三）を見ると、『瓔珞經』

の敦煌写本には、スタイン収集の S.6380（二四一頁）と小川勤之助藏本（三三四頁）の二点が数えられる。「大統十七年」（五五一年）の奥書を有する小川藏本²については未見であるが、S.6380 は『敦煌宝蔵』第四五冊によつて参看が可能である。これは下巻のみが現存しており、かつ冒頭部分を僅かに欠いている。また書写年代を示す奥書等は見られない。

さて、敦煌写本中の戒律文献については、総合的な先行研究として土橋秀高『戒律の研究』（永田文昌堂、一九八〇）があり、これによればスタイン収集写本中に『瓔珞經』は三本あることが指摘されている（六六二頁）。

これに対して『敦煌遺書總目索引』や『敦煌宝蔵』の索引目録である『敦煌寶蔵』遺書索引（中華佛學研究所論叢一〇、法鼓文化事業、一九九六）には、スタイン収集の『瓔珞經』写本としては、S.6380 のみが挙げられている。しかし、スタイン写本中には、もう一本『瓔珞經』の写本が存在し、それが『敦煌宝蔵』中にも収録されていることが確認された。

土橋氏の指摘する三本のうちの一本にあたるかどうかは不明ではあるが、それはS3760であり、『敦煌遺書總目索引』や『敦煌寶藏』遺書索引、また近年刊行された敦煌研究院編『敦煌遺書總目索引新編』（中華書局、二〇〇〇）、一一五頁では、竺仏念訳十四卷『菩薩瓔珞經』（『菩薩瓔珞本業經』とはまったくの異經）の項に標挙されてしまっているものである。しかし、『菩薩瓔珞經卷上』（『敦煌遺書總目索引』、一八〇頁）「中有品題：菩薩瓔珞經賢聖名字品第三[△]。」（『敦煌遺書總目索引新編』、一〇五頁）と記されていることから理解できるように、明らかに二巻本の『菩薩瓔珞本業經』の写本である。実際に『敦煌寶藏』第二八冊所収の同写本を確認したところ、確かに二巻本『瓔珞經』上巻の写本であった。

本写本もS6380と同様、冒頭に大正蔵で一段強ほどの欠落があり、「有青蓮利。佛（欠落）極青金林利。佛名盡精進。菩（欠落）極有寶林利。佛名上精進。」（大正二四、一〇一〇下）から始まり、上巻末までが完具されている。

この写本が『菩薩瓔珞本業經』ではなく『菩薩瓔珞經』とされてしまったのには理由があり、その品第二に「菩薩瓔珞經賢聖名字品第二」（五四六頁下）と記され、また最巻末に「菩薩瓔珞經卷上」（五五九頁下）と記されていたためであろう。しかし品第三には「菩薩瓔珞本業經賢聖學觀品第三」と本来の經典名が記されている。

奥書等は特に見られず、この点からの書写年代は不明である。一方、書写の形態を見るに、一行あたりの字数は一九〃二二字を基本にしているが、それほど一定しておらず、改行のために一行に二四〃二七字を収めた箇所もまま見られる。この形態と字体を見るに興味深いのが、下巻のみのS6380によく類似していることである。後述の他の諸本との異同の比較においても両写本は、共通する傾向を有しており、あるいは本来一具の本であったのではないかとの推定が可能である。

二 S3760の偈文

このS3760が『瓔珞經』の写本として持つ意義として極めて注目すべき事実を一点指摘しておきたい。

筆者は、印度学仏教学会第五十四回学術大会（於佛敎大学、二〇〇三）での発表及び『印度学仏教学研究』第一〇三号所収「菩薩瓔珞本業經の二十四願偈について」において、これも敦煌写本中に残されていた数少ない『瓔珞經』の注釈書の一である『本業瓔珞經疏』（S2780。大正八五、『敦煌寶藏』第二三冊所収）所収の二十四願偈が、現行の諸本の偈文（三十一偈）より三偈少なく（二十八偈）、願数も二十三願を数えるのみであることを指摘し、この注釈書が『瓔珞經』の成立からそれほど下らない六世紀半ば頃の成立と想定されている^③ことを踏まえ、本来の『瓔珞經』の偈文が後に増広を受けた

のではないか、その場合の意図は、阿弥陀仏の二十四願の願数と一致させることにあったのではないかと論じた。大正藏によって該当箇所を示せば、次の偈末にかけての箇所（大正二四、一〇二上、一一〇二三行）における□の三偈である。

得大明慧 當願衆生 入一切空 滅無明藏

三十二相 當願衆生 相相嚴好 滅依報果

得應身用 當願衆生 乘大法船 入佛法海

我因果願 悉已具足 一切行願 攝在其中

二十四願 攝無量行 信願始門 終大慧本

今於諸佛 前受大願 願今已滿 修進餘行

其中功德 行百千劫 我願乃捨 入無量界

一切菩薩 若入是願 無不得入 薩婆若海

この時点では、右の三偈を有さない二十八偈・二十三願という形式のテキスト自体は未だ見いだしておらず、疏の所収の経文からそのように推定したものであったが、この§340こそ疏から想定した本文とまったく同様、二十八偈・二十三願を数えるものであり、現行の本文の「増広」と筆者が想定したこの三偈を有さない本だったのである（『敦煌宝蔵』二八、五四八頁下～五四九頁上）。

この二十八偈から三十一偈への増広が、ある一定の時期に為されたものであり、前者があくまで経の古形を示しているとするならば、本写本の書写年代自体も相当程度古い時期に置くことが可能かもしれない。これについて現時点で一応の

『菩薩瓔珞本業經』の諸本について（藤 谷）

基準を提示してみると、まず、他の文献におけるこの偈文への言及として、管見の範囲内では、智儼（六〇二～六六八）『華嚴經搜玄記』における言及（大正三五、二八上）が古い例として見られ、そこでは既に二十四願となっている。よって『搜玄記』の成立年代とされる六二八あるいは六二九年頃⁽⁴⁾には、増広された経文が存在していたことが確実であり、本写本は遅くとも六二九年以前に書写されたものではないかと想定することが可能である。もちろん、たまたま伝承されてきた古い形態の本が後代に書写されたものとも考えることも充分可能であるが、その場合でも『瓔珞經』の六二九年以前の古形がそこから窺われることは同様であり、『瓔珞經』研究における本写本の重要性は揺るがない所であろう。

三 四十二位の秦名

この§340と他の『瓔珞經』の諸本との関係において、さらに注目すべき点を示す箇所として、賢聖名字品第二における四十二位の菩薩（仏位を含む）の秦名の標記法がある。大正藏に（割注を「」で標記）、

佛子。所謂留伽度【秦言發心住】留諦伽度【秦言治地住】留羅伽【秦言修行住】……等とある箇所（大正二四、一〇一中）であり、四十二位の梵名にあたる「留伽度」等を順次掲げ、その訳名を「發心住」等と割注によって示している。こ

の箇所について、まず既存の諸大藏經の所収テキストの形式がどのような関係にあるかを確認しておきたい。

大正藏の校勘記はこの割注による標記法の異同については特に言及していないが、『中華大藏經』（以下『中華』と略）の校勘記（『中華』二四、八六四～八六五頁）を見ると諸本中に異同があつたことが確認される。

『中華』所収の『瓔珞經』は、金藏の影印を底本とし高麗藏・房山石經本及び江南諸藏五本（普寧藏を欠く）との校合が為されている。この八本の中、高麗藏（東國大学校刊影印本も確認）と房山石經本（中国仏教協會編影印本も確認）⁽⁷⁾とが割注とし、他の金藏及び江南諸藏五本（續砂藏影印本も確認）⁽⁸⁾が本文中へ繰り込むという形式となっている。

ここで、高麗藏と房山石經本とが一致し、金藏が異なっているという点は、大藏經の系統分類から考えて甚だ興味深い問題を提起している。

竺沙雅章氏による刊本大藏經の三分類という画期的な見解によれば、金藏と高麗藏とは開宝藏を承ける第一類藏經とされるのに対して、房山石經本は第二類である契丹藏に深く関係するとされ、それ以外に江南地方で開版された第三類の江南諸藏があるとされる。

そこで、同じく一行十四字、千字文番号も同じく「尅」であり第一類藏經としての同系統性を明らかに示す金藏と高麗

藏が、ことこの秦名の標記法については明らかに異なり、かえって第二類に準ずる房山石經本に一致しているわけである。のみならず、今回はその詳細は省略したいが、『中華』によって金藏・高麗藏・房山石經本三者の本文の異同を整理してみると、明らかに高麗藏と房山石經本との一致度の方が、金藏と高麗藏との一致度よりも高いことが確認される。これをどのように考えれば良いか。

筆者の考えるところ、この原因は、高麗藏の校正の結果によるのではなからうかと思う。高麗藏再雕本の編纂の際、守其等によって為された校正の過程について、ここで詳論する余裕はないが、ともかくその際に底本とされたのは開宝藏（第一類藏經）の復刻である高麗藏初雕本であつたのに対して、校本として契丹藏（第二類藏經）が使用されていた事実を想起すべきである。第二類藏經に近い房山石經本は、この契丹藏の姿を伝えるものであつた。だとするならば、高麗藏において石經本と一致する箇所は、校正の際に契丹藏に従つて底本（高麗藏初雕本）を変更した箇所であると考えることができからであり、この箇所の秦名が割注形式になっているのも、契丹藏の形式に基づき底本を変更したためと想定されるのである。

高麗藏再雕本の校正に関しては、一般に『高麗国新雕大藏校正別録』で確認可能とされているが、これには全藏中の六

十二種七十四卷の校正が収められているのみであり、その中に『瓔珞經』は含まれていない。また、『別録』中に校正が収められていないものでも、各々の經論の卷末に校正が記されている場合もあることが指摘されているが、⁽¹⁰⁾『瓔珞經』には、その記録もまた存在しない。よって、高麗藏の『瓔珞經』の校正の有無・実態について詳細は窺えないのだが、逆に房山石經本と高麗藏本の一致箇所が比較的多いという事実や、この割注形式への変更といった点が、その校正の状況を推測する一助となるかもしれない。

四 敦煌写本と諸本との関係

そして、この第二類藏經の特色とも言うべき割注の形式が、他ならぬS.3400にも見られるのである（『敦煌宝藏』第二八冊五四七頁）。

そこで、敦煌写本と他の刊本大藏經諸本との関係を明確にするために、『中華』本に校勘記の付された箇所、つまり諸本中の本文に異同がある箇所について、敦煌写本との異同がどのようにになっているかを、下巻にあたるS.3388も合わせて確認してみた。

その結果、詳細は省略するが、まず、敦煌写本は第三類である江南諸藏に比して、第一類にあたる金藏・高麗藏と第二類に準ずるとも言うべき房山石經本との一致度が圧倒的に高

『菩薩瓔珞本業經』の諸本について（藤谷）

いことが判明する。前者が上巻で二七%、下巻で一六%程度しか一致しないのに対して後者の三種の本は、上下巻合わせて六八%〜八四%程度の範囲で一致している。さらに三種の中で最も一致度が高いのは他ならぬ房山石經本であり、上巻で七二%、下巻で八四%が一致している。先の割注の形式同様、本文の記述の傾向から言っても、『瓔珞經』の敦煌写本は房山石經本ひいては第二類藏經にもっとも近いと言えよう。同様のことが改行の位置からも窺える。諸本は、それぞれ一行あたり十四字（第一類）なり十七字（第二・三類）なり、一定の字数を基準としているのだが、段落の切れ目など改行を行った箇所は、一行がその基準の字数を下回ることとなる。その位置が諸本によって異なるのだが、敦煌写本と房山石經本が共に他本と異なる箇所での改行をしたり、またしていなかったりする場合が比較的多く見られるのである（今回詳細は省略）。

一般的に敦煌写本が房山石經本ひいては第二類藏經に近い関係にあり、それらが唐代の長安写經の系統に属する優れたものと想定されることが既に指摘されている。⁽¹¹⁾『瓔珞經』の場合においても敦煌写本は房山石經本に近く、またその敦煌写本は先に検討したように經の古形を示す可能性が強いとする本稿の検討結果は、その想定を傍証する一例となると言えよう。

『菩薩瓔珞本業經』の諸本について（藤 谷）

おわりに

以上、『瓔珞經』のテキストについて、特に敦煌写本S.3460を中心に検討してみた。今回は紙数の都合もあり、本文の異同の具体的な状況、さらには諸大藏經収録テキスト間のさらに詳細な相互関係や注釈書に見出される経文との比較検討などは省略せざるを得なかった。これらについては、『瓔珞經』のテキストを総合的に評価する観点から別稿を期したい。

- 1 初版は、商務印書館、一九六二年。また『敦煌叢刊初集、二』（新文豐出版、一九八五）所収本がある。
- 2 『第十五回大藏會展觀目錄』にその奥書が録されている。『大藏會展觀目錄（復印）』（文華堂書店、一九八二）、二七五頁參。
- 3 青木隆「地論宗の融即論と緣起說」、荒牧典俊編著『北朝隋唐中国仏教思想史』（法藏館、二〇〇〇）所収、一九四〜一九六頁參。
- 4 木村清孝『初期中国華嚴思想の研究』（春秋社、一九七七）、四〇四頁參。
- 5 ただしこの梵名はおよそ正確な音写語とは言えず、「頗る怪しむべき」ものが多いことは、佐藤哲英「瓔珞經の成立に関する研究」、『続・天台大師の研究』（百華苑、一九八二）所収、八四〜八八頁を參。
- 6 『高麗大藏經』第一五卷（東國大學校、一九六〇）、一〜二〇頁。なお、筆者が利用した一九六〇年（增紀四二九三年）刊の大谷大学図書館所蔵『高麗大藏經』では『瓔珞經』は十五卷に

- 収録されているのに対して『高麗大藏經總目錄・解題・索引』（東國大學校、一九七六、日本語版、同朋舍、一九七八）では十四卷の所収となっている。これは本学所蔵本が「先に刊行した數卷の影印本のなかにあった配列錯誤」（同目錄、日本語版収、李箕永「高麗大藏經、その歴史と意義」、一七頁）を有するためであろう。これについては、李瑄根「高麗大藏經 影印本の完刊に臨んで」（同目錄、日本語版収、三頁も參。また、影印本及び東國大學校本の高麗大藏經について詳細は、馬場久幸「高麗大藏經の版本に関する一考察——影印本を中心として——」（『印度学仏教学研究』五十一〜二、二〇〇三）、同「東國大學校本高麗大藏經について——高麗大藏經の卷数を中心に——」（『印度学仏教学研究』五十二〜二、二〇〇四）も參。
- 7 中国仏教協會編『房山石經（遼金刻經）』第二冊（中国仏教圖書文物館、一九八七、四三九〜四五八頁）。
 - 8 延聖院大藏經局編『宋版磧砂大藏經』第一四冊（新文豐出版、一九八七、六〇〜七二頁）。
 - 9 竺沙雅章「漢譯大藏經の歴史——寫經から刊經へ——」、『宋元佛教文化史研究』（汲古書院、二〇〇〇）所収等參。
 - 10 藤本幸夫「高麗大藏經と契丹大藏經について」、氣賀澤保規編『中國佛教石經の研究——房山雲居寺石經を中心に——』（京都大學學術出版会、一九九六）所収、二五二〜二五三頁參。
 - 11 竺沙前掲書、二九〇頁、三二九頁等參。

〈キーワード〉 菩薩瓔珞本業經、敦煌写本、房山石經、二十四願、四十二位

（大谷大学非常勤講師）

through knowledge (*vijjā*) which must be called emancipation through insight (*paññā-vimutti*). After the first sermon five ascetics, Yasa and his 54 friends, attained enlightenment through being set free from desire (*taṇhā*), which must be called emancipation through mind (*citta-vimutti*). Emancipation under the Bo-tree is the first stage of enlightenment, but emancipation through both sides (*ubhato-vimutti*) is a much higher and deeper enlightenment, which is regarded as *anuttarā-vimutti*.

4. On the Texts of the *Pusa yingluo benye jing*: With a focus on Dunhuang manuscript S.3460

Masanori FUJITANI

Dunhuang Manuscript S.3460, that has been assumed to be the *Pusa yingluo- jing* (T.16, No.656) in various catalogues, is unmistakably the first volume of the *Pusa yingluo benye jing* (T.24, No.1485) compiled in China between the 5th-6th c. A.D. The main distinctive feature of this manuscript is that it has 28 verses on the Twenty-three Vows in the ‘xiansheng mingzi-pin’ (賢聖名字品) (Chapter 2), whereas other texts have 31 verses on Twenty-Four Vows. This form of the verse is consistent with S.2748, the commentary of this sūtra. Hence, most probably it indicates the original form of this sūtra. Furthermore, when this manuscript was compared with other versions, it turned out to be the closest one to the Fangshan Stone Sūtra.

5. On a Comparison between “Original Enlightenment Thought” and “Tathāgatagarbha Theory”

Jūdō HANANO

Mr. Shiro Matsumoto insisted that the “thought of the matrix of the Tathāgata” (*nyoraizō shisō*) is a non-Buddhist teaching because it is *dhātu-vāda*. Upon receiving Mr. Matsumoto’s theory, Mr. Noriaki Hakamaya opposed the concept of “original enlightenment.”

I responded to Mr. Hakamaya’s opposition, stating that the word *dhātu*, as